

## リエゾン心身処方学の展開（２）

### On the Expansion of the Liaison Approach for Psychosomatics (2)

丸 山 久美子\*

#### Abstract

The purpose of this paper is to expand the previous study of Maruyama (2010) on the expansion of the liaison approach for psychosomatics (1). Some examples shows about modern crim of aged people, and comparison of young people and patients of addiction disorder obtained on the scale QOL. We discussed on the problems What is human happiness? in the psychosomatical and theological point of views.

**Keywords** : postmodern society, normal distribution, aged people, human happiness, addiction disorder

#### 幸福を求めるとは何か

人間がサヴァンナの地から抜け出し集団生活をするようになって以来、常に変わず永遠のテーマとなった問題は「人間はいかにして幸福を得ることが出来るか」というものであった。哲学者は、はじめに「幸福」を論ずることに多くの時間を費やした。ある人が惨めな状態の中で常に思うのはこの惨状からの脱出で、それさえ果たせれば幸せになれると考えた。思春期になれば、自分の居場所を見失って空しさに中におぼれている少年少女たちは自分の実態を確かめるために「リストカット」という危険な行為をなんとも思わずに淡々と実施してしまう。ポストモダン社会の規範はこのような実態のつかめない一つ一つの行為の中で作られてゆく何がしかのストーリーであると社会学者は言い、心理学者はナラティブ・セラピーと称する心理療法をクライアントに施して、彼らに何らかの物語を語らせ、そこで、本来のあるべき自分の姿を幻想させ、自分の物語を膨らませてゆくことで幸福をつかみ取ることが出来ると考えた。社会全体に大きな規範が失われてゆく場合、この種の小さな物語の積み重ねが究極において欲するの

が「私の幸福」の探求につながる。この課題を追求したのは、ベルギーの詩人で劇作家のメーテルリンクが描いた「青い鳥」（１９０８）で語られる物語に示される。幸福とは果てしなく広大な空を飛翔する美しい鳥であると錯覚させるものである。幸福は際限もなく拡大する。結果的には子どもにとって幸福の象徴である青い鳥は無私の愛、犠牲を伴う愛そのものであるとすれば、子どもたちにとってそれは「母の愛」に匹敵する。つまり、子どもにとって幸福とは母の愛に包まれていることである。これは必ずしも子どもだけに限らず、人間一般の共通項であり、幸福とは肉親から愛されているという実感であろう。

「青い鳥症候群」という現代病がある。これは偏差値エリート末路とも言われ、どこに行ってももっと自分に適した良い仕事がある、自分がしようとしていることはこんな職場ではないと思う。それゆえ、どこにも適応できず、自分の持ち場が頻繁に変わり、どこにも落ち着けず、ついにはニートになってしまう現代病である。

神学者北森嘉蔵は「信仰生活における幸福の位置」というタイトルの講演で「幸福とは自己と環境の間の調和である」と定義している（１９８０）。

この定義は極めてありふれていながら、実際にその定義どおりに幸福を得ようとしても必ずしも

\* MARUYAMA, Kumiko  
北陸学院大学 人間総合学部 社会福祉学科  
心理統計学

スムーズに幸福を得ることが出来ない。何となれば、幸福とは個人の主観が徹底的に重んじられる個人的感情だからである。北森の定義をそのまま解釈すれば、才能にあふれ、資産家の家に生まれた環境の中で育つ人間は、父母を事故でうしない、親戚中をたらいまわしにされた挙句に、養護院へ預けられるような人間と比較すれば前者の方がはるかに幸福の度合いが高いといえるであろう。だが果たして前者の人間が無条件に幸福であるかといえば必ずしもそうとは限らない。何不自由なく暮らしている人間がいかに幸福であるかに見えるので、人々の羨望的になっていたとしても、ある日、突然自殺するという場合もあるだろう。悲嘆のどん底にあり、今日一日の糧を得るのもやっとであると思えるような人間が不幸であるとは限らない。一日の糧を得るのにも苦勞するという社会システムは先進国であれば、[福祉]の役割が充実しているので、人は飢えに悩むこともなく自在に生きることが出来る。[福祉]と[幸福]とは同意語である。だが果たして、福祉国家に暮らす人間が全て幸福であると感じるかといえば必ずしもそうとはいえない。

人間の個人的感情や情操は、満ち足りて幸福な至福といえる時間を限定する。われわれは、今、ここに[愛]という言葉を持示しよう。北森は神学者であるから、当然幸福の前提条件はその信仰にあり、[神は愛である]というキリスト教的幸福観を前提にしている。福祉社会には他者の幸福を願う[愛]の存在が不可欠である。果たして、人は他者の愛を願う存在であろうか。無条件で他者の愛を願うことが出来るのは[神の愛]である。人類愛が神の愛であれば、人も同じく他者を愛し、隣人を愛し、敵を愛する存在でなければならない。しかし、人間は神の愛と同じ立場に立つことはできない。人は無条件で人を愛することの出来ない存在だからである。われわれが真実に幸福であると感じられるのは[神の愛]を信じ、それゆえに他者をも愛することが出来る存在であることを認識する時だけである。人間は最初から宗教的であるわけではなく、現実直面した出来事によって何がしかの[神の愛]を感じ取る存在である。イギリスの心理学者 W. ジェイムス(1890)は神の愛を感じ取る時は次のような感情体験が

必要であるとしている。即ち、[人間が宗教的になる最初のきっかけは、自分の生活の中に何かしら間違っただけがあると感じる、その時である]という。たとえ、幸福な環境の中にあっても何かしらおかしい、間違っていると感じ取る心を宗教的感情であると示唆している。筆者はこの感情を実存的痛み、または懊悩によって引き起こされた虚無の実態であると考え。そうした虚無の道を通らなければ、本当の幸福には到達できないであろうと考える。確かに一生浮かれ騒ぎ、それで満足している人間も存在する。たとえ浮かれ騒いでいても、何かの折に世の中の空しさを感じ取る心を失った人間が、現代社会の中に多勢存在することは確かであろう。したがって、神の愛を感じ取る人間は極めて多いはずである。

リエゾン心身処方学の目的は人間が群れの中で、何かしらの空しさに突き動かされてさまよい、想像を絶する心の痛みや苦しみを苦しんでいる人を敏く察知して何がしかの手を差し伸べ、幸福の何たるかを知らしめる行為であると解釈する。それはつまり、[現存する魂の懊悩]を実態的に把握し、人間が最も人間らしく生きる方法を論ずことの出来る、優れた心の癒し人になることが出来る存在であることを認識するところから始まる。

### 魂の懊悩をいかにして測るか

他者が苦しみもがいてるとき、孤独のふちに沈んで絶望を味わっているとき、そばにいた第三者はどのようにして彼らの懊悩に介入できるであろうか。人は時として、そのような虚無の淵に沈んでいる人を見たとき、己の無力を恥じてその場から逃げ出すであろう。人間はどこからきて、どこへ消え去るのであるか。幸福とは、死ぬとは、如何なることなのか。それは千差万別であり、ひとつの物差しで計ることは不可能である。特に、ポストモダン社会においては多様な人間関係におけるその一つ一つが中心角をもたない個別のものである。価値観が多様化した現代において共通の社会的規範を持たなくなれば人は何をしようとするだろう。自己に対して断固とした価値観を有し、人生の目的を把握し、それを成就するために努力している人は目的に向かってまい進するだろう。

だが、そのような人生の目的や人生観を確立しないまま漫然と生きて大人になってしまった人たちは「生きがいがないから、孤独で惨めだから、話せる友人が一人もないから、私は深い虚無の淵に沈み、ただ暗闇から招きよせる何者かの手に招き寄せられ、死の淵に沈む」しかないと考え自殺するケースが多々ある。特にこの事態は本来青年期における自己確立の過程の中で生じてくる特異な現象であったが、高齢化が進んだ先進国での自殺率は青年ではなく高齢者が多くを占めるようになった。この事態はこれまで「万引き」という窃盗行為をゲーム感覚で行っていた少年が多数を占めていたが、現在では万引きをする大人が増えているという社会現象にまでなっている。彼らの内なる魂のあがきは万引きをすることによって自分の孤独を癒し、万引きGメンによって捕らえられ、万引きGメンや、警察官との交流によってしか人間関係がないとすれば、この恐るべき自体に対して誰が責任を負うべきなのであろうか。

2009年度の警視庁の調査報告書「万引きに関する調査研究」（表1）によれば、万引きをした人たちの多くは「生き甲斐がない」、「家族」、「人とのふれあい」が上位三位を占めており、特に高齢者は「生き甲斐がない」、「家族」の占める割合が最も多かった。

報告書によれば、高齢者の万引きの行動の理由は金銭的な問題ではなく、心理的・社会的生活面に問題が多く、心の隙間をうずめるための倫理観が失われ、窃盗行動を起こしてしまうという。幼い子どもが他人の眼を引くためにいたずらをする行為と似ている。一人住まいのお年寄りが増えてきた昨今、この種の問題が多く世間の注目を引いた原因は明確であるから、出来るだけ高齢者をひとりにしないで、家族が老人に対する心のケアをすることが肝要であろう。心身処方学的見地から見れば、「老人の生い立ち」や「生育暦」ないし

は「それまでの生き様」がこの種の問題に大きく反映していると見るべきであろう。根本的に「生きがいがない」ということは、価値観が多様化している現在において、ただ生きながらえただけで、何をして良いのか分からない老人が増えているということである。テレビが普及している今日でも、テレビを見る楽しみすら失った老人の孤独は明らかに彼らの「魂の慟哭」を意味していないだろうか。ポストモダン社会においては個々人に多様な一人ひとりの「物語」があり、小さな個人の物語はそのまま彼らの生きがいにも通ずる思い出の産物である。思想や理念が画一化していたポストモダン社会以前の社会では、自分で自ら考えなくても命令されるままに、いわば日常的に習慣化した価値観が彼らの生活の規範となっており、その生活は極めて平凡ながら充実したものではなかっただろうか。現代社会の病巣は、価値観の多様化が生んだナルシズムとニヒリズムの混在する歪んだ風土を作り上げてしまったことによる。自分自身と向き合わなければならない時期の青年に表2のような測定尺度を実施し、魂の慟哭は如何なるところに存在するのかを探究した（丸山、加藤、2000）。青年は魂の慟哭を生きがいのなさやいつも孤独であるといった先刻の万引き高齢者の心を反映しているのに対して、嗜癖行動障害者の魂の慟哭の源泉は社会的地位や年齢、名誉などの物質的なものの欠如が原因となっている。この結果はあまりに現実を反映しているので、名誉欲や地位財産を強く欲する人間が嗜癖行動障害を引き起こし、アルコール依存症や麻薬依存症になるという結果を示している。青年は孤独である。先行き不透明な社会の中で何をして良いのか見当も付かないという葛藤が彼らを非行に走らせ、犯罪の温床を作り、新興宗教への盲目的な没頭を可能にしてしまう。とすれば、先刻の万引きをする高齢者の孤独とは自己確立の拡散に陥った青年が明日の希望を失って非行に走るその行動と類似している。青年の自己確立が成就するのは一体どのような過程を経て起こるものであろうか。それは親からの自立のあり方である。人間関係の持ち方である。家族の絆の持ち方である。これはまさに、高齢者が陥る魂の慟哭の原因と類似してはいまいか。それならば、一体人間はいかにして、孤独や

表1 心の支えになるものはなにか  
(警視庁、2009年度調査)

	少年	成人	高齢者
生きがい	37.8	35.0	50.5
家族	20.9	26.5	28.2
人とのふれあい	12.5	7.4	6.4
その他	28.8	31.1	15.0



虚無のふちから脱出できるのであろうか。

前述したように、青年男女50人からなる独自の集団において、人生の意味、自己の存在価値、

表2 23項目のSPスケール(5段階尺度)

1: 年をとることは死に一步近づくことだ。
2: 私はお守りやお札を大切にしよう。
3: 死は全ての活動の終わりである。
4: 世界が滅亡するとしたら、どんな手段を使っても状況を良くしようと試みる。
5: 私はとにかく年齢を気にする。
6: 私は、地位や財産、名誉を生きてゆくための心の支えとしている。
7: 何か不幸なことが起こりはしないかといつも心配だ
8: 日本人はもっと信仰心を持つべきだ。
9: 死んでしまったら、魂も含めて全てが消滅してしまう。
10: 私は今の自分の生き方が気に入らない。
11: 私はいつも孤独であると感じている。
12: 何が起ころうとも、私は私のしたいことをし続ける。
13: 人は死んでも、繰り返し生まれ変わるものだとこのことを信じている。
14: 私には人生に大きな目標があるので、出来るだけ長生きしたい。
15: 私は死の恐怖に関して人よりも敏感であると思う。
16: 私は、生きてゆく上で、名誉や財産にこだわらない。
17: 自分自身と向き合うことに不安を感じる。
18: 私は、市を意識しだしたのが周囲の人より早いと思う。
19: 死後、私は自分の体を検体したい。
20: 先祖の霊魂が自分を見守っているような気がする。
21: 自分に存在価値があるとは思わない。
22: 私の未来は絶望的である。
23: 私は周囲の人よりも、自分の死に関して考えることが多いと思う。

孤独の意味、死生観など、自分が孤独で惨めになったとき、どのような感情状況になると思われるかを記述させ、以下のような23の尺度を作成した。上記の23項目尺度を5段階評定で男女大学生〔1997、285名(男182、女99、不明)〕、嗜癪行動障害者(アルコール依存症、拒食症、薬物依存、家族依存などが通院する診療所の患者)に調査実施した。サンプル・サイズは108名(男28、女80)平均年齢36.1歳、2001)。すでにのべたように、これらの結果は学生と嗜癪患者との死生観や人生に対する態度など大いに異なっている。これは大学生という将来に対する不安や常に付きまとう漠然とした不安感、先行き不透明であることのやるせなさがこの測定尺度に大きな特徴をあらわしており、それに反して、嗜癪行動障害者の特徴である物欲、金品へのあくことなき執着が分析結果に反映している。これらは表3、表4に示されているとうりである。

今日、ポストモダン社会の特徴の一つに物質万能主義がある。これは精神よりも物質に優先順位が高く、物質万能主義がもたらした病気で、彼らの欲することはただ、ひたすら物質のみであり、それ以外に信ずるものがなく、神仏の存在は全く彼らの眼中にはない。物質の最たるものは金銭である。それだけに関心ごとであれば、金銭によって得たものをなんらかの嗜好品で消費し、その中毒にはまって病を得る嗜癪障害者の特徴を余すことなく現わしていることが分かる。それと対照的に実存的懊悩とも言うべき精神的葛藤のさなかに

表3 SPスケールの信頼性係数(大学生)

	I	II	III
① 今の自分の生き方が気に入らない	0.615	0.143	-0.008
② いつも孤独であると感じる	0.826	0.096	0.002
③ 自分自身と向き合うことに不安を感じる	0.512	0.221	0.037
④ 自分には存在価値があるとは思わない	0.561	0.161	0.025
⑤ 死の恐怖に対して他者よりも強い	0.16	0.492	0.192
⑥ 死を意識したのは他者よりも早い	0.145	0.651	0.034
⑦ 自分の死について他者よりも多く考える	0.158	0.701	0.071
⑧ お守り・お札を大切にする	-0.023	0.032	0.507
⑨ 先祖の霊が見守っている	0.027	0.103	0.738
寄与率 $\lambda$	0.355	0.286	0.264
信頼性係数 $\alpha$	0.793	0.783	0.789

表 4 SP スケールの信頼性係数（嗜癖行動障害者）

	I	II	III
① 私はとやかく年齢を気にするほうだ	0.637	0.248	0.031
② 私は地位や財産、名誉を生きて行く支えにする	0.675	0.060	0.031
③ 何か不幸なことが起こりはしないかいつも心配だ	0.612	0.310	0.074
④ 私は生きて行く上で、名誉や財産にこだわる	0.679	0.027	0.024
⑤ 自分には存在価値があるとは思わない	0.168	0.717	0.078
⑥ 私の未来は絶望的である	0.150	0.898	0.152
⑦ 死は全ての活動の終わりである	0.298	0.098	0.682
⑧ 死んでしまったら、魂も含めて全てが消滅する	0.076	0.216	0.855
⑨ 人は死んでも繰り返し生まれ変わるということを信じない	0.194	0.007	0.623
寄与率 $\lambda$	0.466	0.414	0.385
信頼性係数 $\alpha$	0.807	0.899	0.848

ある青少年の苦悩は宗教的願望を求めていることが分かる。何か困窮に陥ったときに彼らが叫ぶ「神様助けて」という「苦しいときの神頼み」は嗜癖障害を起こしている人たちには考えも付かない。彼らは心に助けを求めることを知らず、ただ、ひたすら自分が好む品物におぼれて倒れるだけである。今日、このような社会現象が生じていることを気付くために、彼らの物語に耳を傾ける人はそんなに多くないだろう。

### 宗教の役割

如何なる宗教にもその宗教がもっている戒律や教義、規範がある。その上で成り立つ社会システムが存在した時の人間は甘んじて比較的安定した生活をすごしていた。

統計万能時代を築いたベルギーの統計学者ケトレー（L.A.J.Quetret,1835）はその著「人間の能力の発展について—社会物理学の試み—」において、「平均人」という概念を持ち出し社会は正規分布（図1）の中心に位置し、平均的人間が尤も理想的な人間であると論じた。彼の理論は又、今日においても大きな影響力を持っている。ケトレー指数（ボディマス指数、Body Mass Index, BMI）の算出である。ケトレー指数はカウプ指数とも呼ばれ、主に乳幼児のBMIに用いられる。ケトレーの時代には正規分布が絶対の規範であったから正規分布の形を成さぬものであれば、データが足りないといわれた。大数の法則が原則であった。かりにひとつの規範や価値観などを「物語」と表現すれば、この時代は正規分布がひとつの「大きな

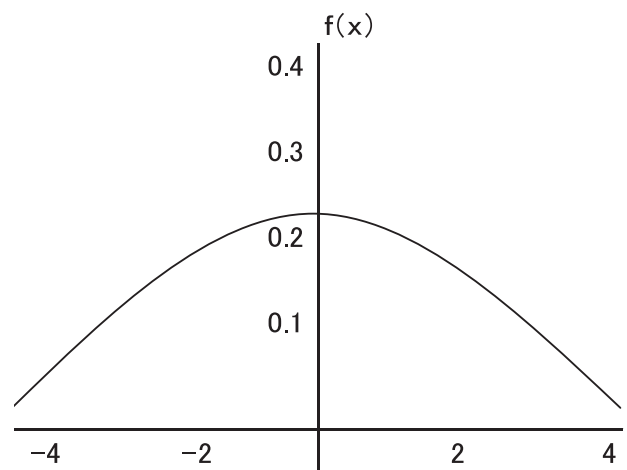


図 1 正規確率分布

物語」として語られ、多くの人間が納得して、ここに平均人の理論が確定する。今日でも厚生労働省は、健康人の概念をケトレー指数で決定している。多くの人間がこの規則に縛られ、ある意味では拘束されて、身長と体重の増減に気を配っている。BMI と癌の罹患率、心筋梗塞や脳溢血の発症率の相関係数が算出され、多くの人はその規範に拘束されて生きているといっても過言ではない。だが、ケトレー指数には限界がある。平均人と同じ限界である。体脂肪率がこの指数の中に含まれていないことである。つまり、体重が重くても体脂肪率が低いアスリートたちにとってBMIは不適切である。このように考えると、正規分布では一概に表現できない様々な現象が起こってくる。特に今日における社会のめまぐるしい変動はケトレーの時代とは全く異なり、「大きな物語」だけで多くの社会現象を論ずることは不可能

である。たとえば、飛行機の墜落に関する分布を考えてみよう。如何に考えても墜落率が正規分布によって説明されるとは考えられないであろう。われわれは現代がケトラーの統計万能時代から数えて約180年前の時代とは特段に異なることを知っている。図2の分布は負の二項分布、別名、ボリア・エッゲンベルガーの分布ともいい、稀現象、伝播作用の起こる現象に当てはまる。即ち、飛行機は一度落ちるとどこかで伝播作用が起こって次々と墜落する。めったに墜落しない飛行機が墜落するという現象に対して如何なる分布状態であるのかを明記したものである。このように社会現象を表現する分布の形には様々なものがあって、正規分布のほかに、 $t$ 分布、 $F$ 分布、 $\chi^2$ 分布などが多く知られている。

さて、人間が誕生して最初に目にするのは自分に乳を与える母親の目である。その目に如何なる意味がこめられているのかを乳児の無意識は正確に捉えていることをわれわれは知っている。わが子に乳を与える母の目はひたすら乳児の状態（どのように乳を飲むのか、どれくらい飲んでいのか）に集中し、愛しいわが子へのその眼差しは、乳児の無意識に確実に保存され、自分が愛されていることを知るようになる。だが、現代の母親は必ずしも乳児の無意識を満足させるような態度や行動をするとは限らない。多忙な母親は子どもの状態に集中的に没頭して、乳を飲ませる余裕がない。彼女は乳児に乳を含ませながら携帯電話で打ち合わせを行い、あるいは他愛もないおしゃべりに集中するというそれぞれの「小さな物語」の中に生きている。あるいは自分の時間を奪ってゆくわが子へ憎悪の眼差しを向け、乳児の無意識は自

分が愛されていない、どこかに捨てられるという不安神経症の温床を作りあげる。乳児はこの世界が恐怖に満ち、不幸で恐ろしい場所であると直感する。世界に対するこのような畏怖の念は、自分を見つめる母のまなざしへの不信となって、母が自分を捨ててどこかへ行ってしまおうのではないかという母子分離不安におそわれた。子にとって母との一時的な別離は「小さな死」を意味している。どんなに夢中になって楽しく遊んでいても母がどこかへ出かけようとする気配を察知すると、子は脱兎のごとく母のそばに駆け寄りスカートの裾をつかんで、自分も一緒に連れて行ってくれとせがむ。我々はこの光景を幾度か目にはしていないだろうか。容易に親離れのしない子どもは初めて目にした母の目の中に微妙なかげりを捉えて潜在化させ、思春期になって顕在化すると、それが家庭内暴力や登校拒否、いじめ、自殺、殺傷事件の反社会的行動の温床となるのである。このめぐり合わせは、老人の反社会的行動の原因ともなっていることをわれわれは十分に良く知っておくことである。老人が「小さな物語」の中で子どもや家族に対する絆を放擲して生きてきたのであれば、あるいは老人は子どもに復讐されているのかもしれない。孤独な老人が巷を徘徊し、反社会的行動を引き起こすことがあるとすれば、あるいは、その生き方に十分な責任を持つことが、これまでの人生で「小さな物語」を物語ってきた人間の責任であることを、これからの社会に生きる人間は熟知する必要があるのではないか。そのために力弱く、たとえ自分では強い精神力を持っていると自負している人でも、どこかで重大な誤りを起こす可能性があることをわれわれは知っている。

たとえば、1998年に起こった14歳の少年の犯罪を思い起こしてみよう。彼は長男として母の重大な責任感の元に厳しくしつけられたが、それは母にとって子を愛するが故の何ものでもなかったはずである。しかし、少年は母の愛をそのように解釈するほど、たくましい精神力を持っていなかった。彼は寄る辺なく孤独であり、如何に母の愛が強くても、その力を信じる事が出来ず、もっと力強い存在を求めはしなかったか。つまり、彼の感性には実存的に生きるための糧が絶対に必要であった。彼は自分よりも弱い動物や子どもを

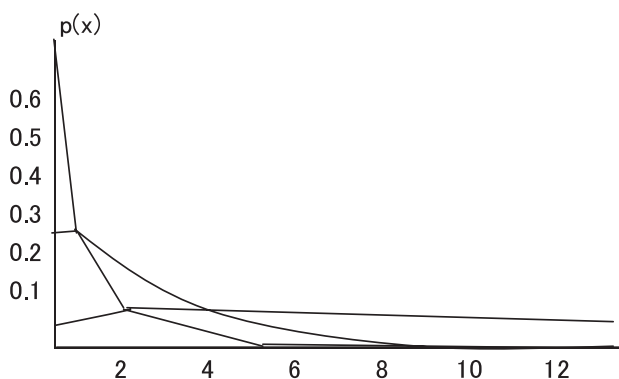


図2 負の二項分布の確率分布  
(ボリア・エッゲンベルガーの分布)



殺傷し、それを彼が作り上げた「神」に生贄としてささげる行為を行っていたのである。存在感のない透明な自己が作り上げた「怒れる神」に捧げる生贄を「聖なる儀式」によって自分の世界を作り上げていたのである。もし、少年の魂の中に神の痛みに基礎付けられた愛を主なるテーマにする神学の真髄を理解させることが出来る環境状況にあったのなら、彼はそのような猟奇的な行動を起こさず、自らの人生を別の角度から見直していたかもしれない。彼にとって必要な要素は魂の飢餓状態への救いの業であった。彼が幼少の頃から彼自身の持っている「霊性」の賜物を豊に保つように教育されていたのなら、われわれを震撼させた驚くべき殺人事件を未然に防ぐことが出来たと筆者は長い間考えていた。ただ彼の反社会的行動に対する攻撃のみならず、彼の内面に存在していた真摯な魂の枯渇状態を早いうちに察知していることが必要だったのではないだろうか。これこそ「小さな物語」が蔓延するポストモダン社会において我々が他者に配慮できる必要最小限の要素ではあるまいか。

こうした前提条件の下に今後われわれの社会はより進んだポストモダニズムの社会となるであろう。この現象を統計学的に表現すれば、図3に見られるようなベキ乗分布の形をとる。人はいかようにも多様に生き、「小さな物語」を作り、その中で生きてゆくために必要最小限のエネルギーはどこに存在するのであろうか。人間の力を遥かに超えたところに存在する神をあがめるその姿勢、

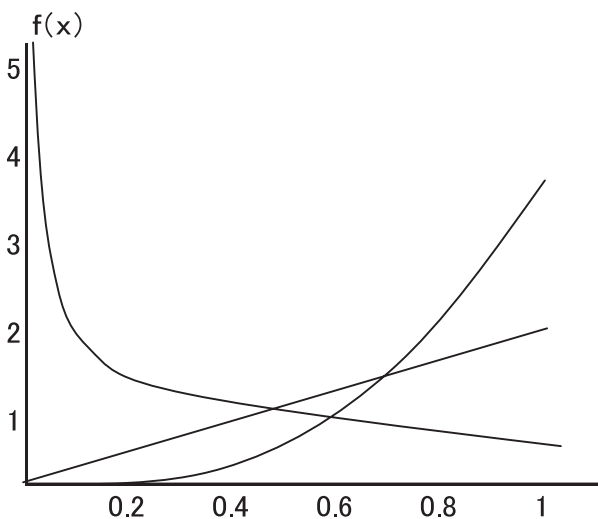


図3 標準ベキ乗関数分布

それへと向かう精神の力や魂の癒しを求める謙遜な心の中に存在するのではあるまいか。

### おわりに

人間は恐ろしいサヴァンナの地から脱出して、平地に居住し世界を支配する最も優れた生物となった。科学技術は格段に進歩し、世界は便利となった。これらの偉大な知的能力よりも最も人間を偉大なものにしたのは、彼らは自分よりも更に偉大な絶対的力を有する神（仏）の存在を知ったことであり、それによって他の動物と確実に区別されていることを悟ったことである。われわれはそのとき地に膝まずいて彼らの知的に優れた頭を下げ、両手を合わせて感謝の祈りささげる。全てを神（仏）にゆだねることによって、われわれの存在が保証され、生かされていることを知る。ポストモダニズムの社会の中では人間の傲慢が多く、悲劇をもたらすが、それはいつしか、謙遜で優れた人間であれば、いまや予想される社会の液化化を防ぐ砦となることを知るのである。

### <参考文献>

- 印東太郎編 1973 心理学研究法17 モデル構成 東京大学出版会  
 北森嘉蔵 1946 神の痛みの神学 新教出版社  
 北森嘉蔵 1996 北森嘉蔵牧師説教・講演集 千歳船橋教会  
 丸山久美子 2007 心理統計学—トポロジーの世界を科学する— アートアンドブレイン  
 丸山久美子編著 2008 21世紀の心の処方学—医学・看護学・心理学からの提言と実践—、アートアンドブレイン  
 丸山久美子 2009 リエゾン心身処方学の概念と方法 北陸学院大学紀要 第2号 No.2 55-60  
 丸山久美子 2010 リエゾン心身処方学の展開（1） 北陸学院大学紀要 第3巻 183-189  
 丸山久美子 2011 「生と死」の行動計量—QOL評価測定尺度の研究—145-155（柳井晴夫編 行動計量学への招待 朝倉書店）  
 丸山久美子・加藤淳 2000 QOL測定における「死生観」の問題 第1回QOL学会大会発表論文集 10-11  
 警視庁 2009 犯罪白書